

「勝手にしろ！」男は遂ひに恚う叫んだ。

順序だつた女の口に、道理は認めても、男は女に負けまいもの、と昔から定つて居るやう、思つて居る男の中の男であるから、鈍辯の悲しさ、沈黙をやむなくされる時に、口を突いて出て来る言葉は此語である。

女は黙つてしまつた。黙つて男の顔……を眺めた。が後からであるから顔は見えなかつたが、くわつと脇を向いて痰を吐いた時の横顔は赤かつた。

満身の怒りをこめて、俄に強く曳き出したので、男の怒つたのを見ると、稍々氣の毒になつて、言ひ過ぎた吾が言葉を考へて居た女の後押しの手は車から離れた。離れた其足許に、捨てられた虫喰ひ茸が、車の齒にかけられてつぶれたのが伏目の目に入る。ハイ／＼と若い女の聲がして、草をつけた馬が脇を通る。馬を遣り過して向ふを見ると、男は餘程離れて居た。

思ふことを、言はふと思つて口にして見ると、さて十分に往かない。十分に言ひあらはさうと、彼々して恚うしてと様々に其言葉を補つて見る。けれども補ふ其言葉がまた十分に往かない。對手はそんなことゝは知らないから、言つた其言葉に對して彼々と言ひ恚うと答へる。で、えゝさうぢやないわ！とまだるい自分の言葉を叱りもあえずに對手の言葉に腹立しくなつて来る。眞面目にも言ふ時といふと吃り氣味の口は益々吃つて来て、終ひには勝手にしろと叫ばせられてしまふ。叫んでしまつても言ひたいことは腹の中でもぢやく／＼して居るので、男は夢中になつて足を急いだ。

夫婦は今朝、夜のやう／＼明け離れた頃に、郡山をたつたのであつた。行手に濃く罩めた霧の中に、仲よい話を轍の音に戰して、笹川の宿にかゝつた頃、ふとしたことから大聲になつて、十戸寺は今夢中で過ぎやうとして居る。

頭重げに伏した兩側の稻田に、役目果して氣が緩ばんとやらに、横倒れの案山子がところ／＼。近くの松山に人の聲するのは、茸狩りの人達であらう、白い手拭ひが時々見える。

箱車の輪の回りに交る股引の足の大跨なのを眺め乍ら女は歩を早めず緩めず、何て怒りつぽい人だらうと心に繰り返した。併し正直な人だと心の何處でか言つた。親方が死んでから、いつとはなしに身を委した男は親方の弟子であつた。しかも、仕事かのろいとて一日小言を言はれ通しの……。しかし、あのエへ、とよく笑ふ、笑戲の二つも云ふ、陰へまはつては袖も引きかねまじき、も一人の弟子と、これで五人目だとかいふ、よく女房を取り替へる、年の親子ほども違ふ親方との中にあつて、内儀さん／＼と眞面目で呼んでくれる男の、むつつりとした正直顔が。殊の外氣に入つたのであつた。あまり面倒を見過ぎるとて、親方がよく喧嘩をはじめたものだつけ、然しなんの、負けては居なかつた。などゝいふやうなことを女は考へて居る。

弓なりに曲る道の、丁度其中頃にあたる石橋を渡り乍ら、男はふつと振り回つて見た。股引姿甲斐々々しい男仕度の女は餘程離れて来る。男の心はよほど解けて居た。一體彼れは悪る氣といふは少しも持つて居ない男である。彼れの正直はよく怒らせて、またよく解けさせる。考へて見れば何でもないことだと、二すぢ残る荷馬車の後を無意識に辿り乍ら心に呟いた。それからもう、晩の木賃宿の、膳にのぼる肴のことなどを考へて居る。

道はやう／＼廣くなつて来て、草を飛び出て前をよぎる蝗もなくなつた。今汽車が通つたばかりの踏切りを越して須賀川の地にはいつた。空に漂ふ煙は東へと高く薄く、程近い町はづれの停車場の、ブリツチを行き交う人影が小さく見える。男はやをら車をとめた。町に入る用意に、白と赤とで張つた看版の大洋傘を箱の上に廣げてたて、序でに煙草一服、またそろ／＼と曳き出した。追ひついた女は此時車の後に手をかけて居た。しかし夫婦は何も言はなかつた。

ぞろ／＼と出て来る停車場からの人達に交つた夫婦は賑かな町には入つた。朝ながら市日の今日は賑はしい。

「洋傘の張り替なほし——」

一聲呼んで息を引いて、あたりの店を見廻した時、女は二三軒後れて、とある呉服店の前に腰をかゝめて居た。

「洋傘の張り替直しはござんせんかね？」

少しなまりのある、尻上りの優しい聲が客を振りむかせる。

町も最早中頃と思はれる頃、暫く道に姿の見えなかつた女は一本の洋傘持つて車に近づいて来た。男は車を道によせて、轆をくゞつて車をとめる。

「どこだ？」道具の箱をひき出し乍ら。

「骨二本に、柄と……」夫婦は常に反つて居た。

敷いて間もない砂礫の上に、夫婦は蹲んで仕事をはじめた。

「お前さん、一寸其鋏とつとくんな」

「おいまた」

男の聲は常にも増して勢よかつた。

山路の霧も晴れたであろう、打ち水のあと景氣よい街に、朝日のかげはうら／＼かにさして居る。

丁度向ひの魚屋に、勇ましい呼聲がして鰹の荷が今はいつたらしい。

【入力者注】

底本のルビは一部のみ残しました。

底本…「第二編 明治才媛文集第一」明治四十一年(1908)年三月二十三日(東洋社)

入力…小林 徹

公開…令和六年十月十三日。

リンク…[水野仙子作品年譜に戻る。](#)